最果ての一匹狼

第3回 私が酪農家なら今やるべきこと



㈱上原農場
代表取締役・四代目
上原 安浩

1964年生まれ。初代が1915年に北海道中標津町へ入植。現在、ソバを240ha、種イモを10ha、生食用馬鈴薯を10ha生産。農産物保冷庫と蕎麦粉製粉施設を所有し、日本全国に販売。2023年春に「最果て食堂」を知床と博多にオープン予定。
https://ueharafarm1915.co.jp/

私の農場では酪農も過去に50年ほど手がけており、酪農業の過酷さは誰よりもわかっている。まず、単年度の赤字は金融機関に高度な計画書を提出し、支払いを5年リスケジュールしてもらう。単年度の赤字に耐えられないくらいの酪農への情熱なら、早めに辞めたほうがよい。前向きな勇気は必要だ。

次に、自分の共済の事故率を眺めて反省したいことがある。もし、事故率がそれなりに高く、家畜は経済動物で回転が大事だから2産か3産で廃用にし、命をなんとも思わない酪農をよしとしているなら、もう末期だ。この場合は残念ながら未来はない。程度の低い最悪の酪農家と言わざるを得ない。

事故率が低く、家畜がゆったりとして4産、5産と平気で稼ぐ優秀な酪農家なら、2、3年リスケジュールすれば、問題なく乗り越えていく能力はあるだろう。

農協の営農部にお任せの酪農家は論外で、好きなようにしてもらえばよい。

では、事故率をどう減らすか？これは結構簡単で、コストもかからない。

初めに、スラリータンク内の悪い菌であるサルモネラ菌などを常に検査し、必要があれば対応する。

そして、プロらしい土壌学に基づいた飼料づくりだ。作物は毒でも引力の法則で吸収してしまう。牧草を早刈りすればよいとか、ウチは放牧酪農にこだわっているから安心だとか、完全にど素人な発想と考え方は捨て去る。牛を愛している酪農家ならすぐに気づくはずだが、肥料分が残留している状態の餌は毒だ。スラリーの撒きすぎでアンモニアの残った苦い牧草やサルモネラ菌のウヨウヨしたスラリーも同様だ。

国内には光合成を促す優れた資材がたくさん流通しているので、ぜひ試してほしい。効果は絶大だ。具体的には、有機リン酸やアミノ酸肥料、水溶性ケイ酸、苦土といったところになる。農協系統が昔から取り組む大量の炭カルでは、とてもではないが、土壌学が成り立たない。この分野は、農民がいくら組織に改良や変更を求めても、ほぼ聞き入れてくれない。独自に動こう。

合言葉は、光合成、スラリータンクの細菌検査、牛舎の環境整備。牧草については肥料分が残留していないか、何度も分析することだ。

それ以外に酪農家がさらに伸びる方法はないと断言する。この認識が全国規模で実践されれば、日本の酪農は世界レベルになるだろう。

毎日、光合成とか、スラリーの上手な使い方を考えると、劇的に変わってくる。輸入される餌が高いとかではない。最も大事なことをないがしろにしてきた結果、変化に耐えられない酪農家がそこにいるだけだ。大切な家畜を程度の低い餌でいじめないこと、私から言えるのはそれだけだ。

土は、地球の火山活動で覆われた溶岩の大地から、1万年かけてできあがった奇跡の産物だ。溶岩に大量に含まれるケイ酸や苦土を使い果たした農地ばかりの日本では、土壌改良の見直しが欠かせない。

失礼な文章もあっただろうが、同じ農民として頑張って生き残ってほしい。

（つづく）